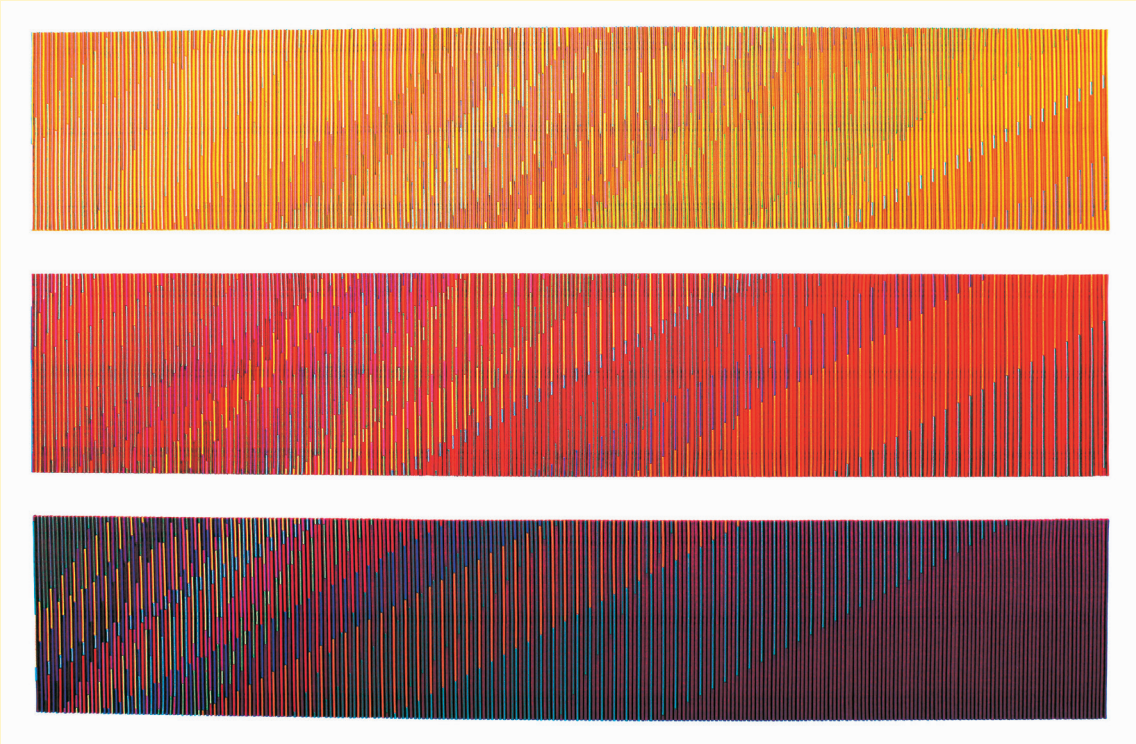
田辺市立美術館NEWS

ORANGE Vol.32



草間喆雄《Dawn》　2013（平成25）年　　田辺市立美術館蔵

私の制作と《Dawn》について

武蔵野美術大学在学中に、ニューヨーク近代美術館で開かれた「Wall hangings」展の記事をインテリア雑誌で目にし、衝撃を受けました。そこには繊維造形作家の先駆と言えるレノア・トーニー、マグダレーナ・アバカノヴィッチ、シーラ・ヒックスらによる、繊維のアートとしての展開が紹介されていました。従来の繊維を素材としたデザインとはまったく違う、自由な発想、形態を有した、今までに見たことのないものでした。

大学卒業後は京都の川島織物に就職し、デザイナーとして働きましたが、3年してアメリカに渡ることを決意し、かの地でファイバーアートの黎明期を体験しました。

以来、伝統的に使用されてきた技法「織」等を用い、繊維による新しい造形表現に挑戦していくことが私に託された使命であると思い、技法と素材の試みを重ねながら制作を続けています。

現在の私の作品には「織」、「コイリング」、「フェルト」の3種類の技法が使用されています。《Dawn》は織による作品で、漆黒の夜から朝へと刻々と変化する様を6色の縦糸と65色の横糸で表現しています。この作品には、1970年代初から挑戦している二重織技法を用いています。二重織は古くから使用されている技法で、袋状に織れることから「袋織」や「風通」とも呼ばれます。この二重織の特徴、特に立体的に作品を仕上げられることを生かした作品制作にこの50年間取り組んできました。当初は、白あるいは自然素材色のみを使用していましたが、80年代から単色、多色の使用に変わり、現在まで続いています。

（草間　喆雄）

※今回特別に作者の草間喆雄氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

絵本と日本画家

絵本のための絵画は、それを専門とする作家によってばかりでなく、しばしばそれ以外の画家たちによっても手掛けられます。民話や説話、伝説などからオリジナルのものまで、絵本の中に展開する物語とともに、それらの優れた絵画の力によって、私たちの想像力は大きく喚起されます。文学と美術とが響きあう絵本原画の世界は、子どもから大人まで、誰もが楽しめる芸術の一分野となっています。

絵本原画の制作は、定まったテーマをもとに印刷を前提として描かれる、特殊な絵画表現の領域ですが、それを専門としない画家たちも、自身の創作意欲をそこに注いで、独特の作品を生み出しています。日本画家についても例外ではなく、技法や画材に工夫を重ねて、繊細で詩情に富んだ、素晴らしい絵本のための絵画を多数残しています。

この日本画家による絵本原画の制作に焦点をあてて紹介する展覧会を、今年4月から5月にかけて田辺市立美術館で開催します。10人の日本画家（生年順に、秋野不矩、堀文子、稗田一穂、入江酉一郎、朝倉摂、竹山博、三橋節子、竹内浩一、岡村桂三郎、福井江太郎）の絵本原画とその代表的な日本画作品を同時に展示して、日本画家としてのそれぞれの特徴と、絵本原画の制作にうかがえる個性をお伝えしたいと思います。

また、熊野古道なかへち美術館では、昨年田辺市立美術館で特別展を開催した秋野不矩（1908−2001）の、絵本原画3シリーズと3点の日本画作品による展覧会を開催します。秋野不矩は日本画と同様に絵本原画の制作にも力を入れていた画家ですが、昨年の展覧会ではこの部分を取り上げきれませんでした。今回、浜松市秋野不矩美術館の全面的なご協力によって、絵本原画を軸とした一つの展覧会としてご紹介できることとなりました。改めてその芸術をご堪能いただければと思います。

（学芸員　三谷　渉）

秋野不矩　絵本「きんいろのしか」原画より
『秋野不矩の絵本』展に出品　　浜松市秋野不矩美術館蔵

INFORMATION

絵本にみる日本画

会　　場 ／ 田辺市立美術館
観 覧 料 ／ 600円（480円）
学生及び18歳未満の方は無料
※（　　）内は20名様以上の団体割引料金です。

秋野不矩の絵本

会　　場 ／ 熊野古道なかへち美術館
観 覧 料 ／ 400円（320円）
学生及び18歳未満の方は無料
※（　　）内は20名様以上の団体割引料金です。

会　　期 ／ 2020年4月18日（土）～5月24日（日）
開館時間 ／ 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休 館 日 ／ 毎週月曜日（ただし5月4日は開館）
4月30日（木）・5月7日（木）

新収蔵作品について

昨年度は、3点の作品を購入し、6点の作品のご寄贈をいただきました。

購入した作品は、織作家、朝倉美津子（1950−　）の《水平線の夢》（2010年／105×300cm／タピスリー）と、同じく織作家の草間喆雄（1946−　）の《Dawn》（2013年／225×400cm／タピスリー）、《Koto−L》（2016年／各200.0×37.5×h.19.0cm／立体4点）です。

《水平線の夢》は、朝倉がオランダ留学からの帰国後に展開している「水平線の夢」シリーズの近年の最も充実した作品の一つです。草間の《Dawn》は、第8回国際ファイバーアート・ビエンナーレで銀賞を受けた作品で、今号の表紙に図版と作者に寄せていただいた言葉を掲載しています。《Koto−L》はコイリングの技法を用いた、草間の最近の制作を代表するもので、昨年の第4回金沢・世界工芸トリエンナーレにも出品されました。

朝倉美津子と草間喆雄は、当館が2017年から開催している展覧会シリーズ『現代の織』の3回目（2018年）と4回目（2019年）で取り上げた作家で、購入した作品も、その時に出品していただいたものです。

ご寄贈いただいた作品は、草間喆雄の4点の作品、《Sen》（1976年／各200×60×h.14cm／立体2点）、《Horizontal》（1996年／68×335cm／タピスリー）、《SpiralRing》（1998年／径320×h.30cm／立体）、《Layered−G》（2013年／170×50×d.45cm／立体）と、南画家、渡瀬凌雲（1904−1980）の2点の作品、《熊野二十五景（甲）（乙）》（1924−27年頃／各21.0×27.0cm／画帖2冊）、《仙境熊野》（1975年／170.0×243.5cm／四曲屏風　※右の図版）です。

草間の作品はすべて作家ご本人の手元に残っていたもので、アメリカ滞在中から近年にいたるまでの、制作の特徴がよくうかがえる貴重な作品をご寄贈いただきました。凌雲の作品はいずれも長らく当館に寄託されていたもので、青年期と晩年の優品です。収集家の方と凌雲のご遺族からご寄贈のお申し出をいただきました。

昨年度も、当館の展覧会活動、調査・研究活動の積み重ねが、作品の収蔵へと結びつきました。こうした美術館の根幹となる活動の成果によってコレクションが拡充してゆくことを、今後も継続したいと思います。

当館の活動にご理解をいただき、作品をご恵贈いただきました方々に、改めて心よりの感謝を申し上げます。

（学芸員　三谷　渉）

渡瀬凌雲《仙境熊野》　　1975（昭和50）年

館内での撮影について

田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館の館内での撮影について、新年度から統一したルールをつくることにしました。

これまで熊野古道なかへち美術館では、建築に関心のある方が多く来館されることもあり、旧中辺路町立美術館時代から、展示室内以外は館内の撮影を可としてきました。一方、田辺市立美術館ではそのような要望も少なく、図書閲覧のスペースもあることから、館内の撮影は一律にお断りしてきました。

しかし、カメラを構えなくても携帯電話やスマートフォンなどで手軽に写真が撮れるようになり、そうして撮影した情報を、誰もが広範に発信できる社会となってきました。田辺市立美術館でも『現代の織Ⅲ　朝倉美津子』展を機にエントランスホールに「みんなで染め糸カプセルのタピスリーをつくろう！」のコーナーを設置した際には、つくった染め糸カプセルを写真に撮って残しておきたいという声をたくさんいただきました。これからも展覧会に関連した企画の中で、ご来館の方々に参加、体験していただくようなコーナーを設けてゆくことを考えています。そのときの記録や思い出として写真を持ち帰っていただけるようにも、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館ともに共通した館内での撮影のルールを定めることとしました。

展示室を主とする有料のスペースは、作品と鑑賞の環境を保護する観点から、引き続き許可なく撮影することを禁止としますが、それ以外の無料スペースでは撮影を可とします。ただし、フラッシュ等の照明器具、三脚等を使用することや、他のご来館の方のご迷惑になるような行為はお断りします。また書籍等の内容を撮影することはしないでください。

今後も多くの方々が美術館で良い時間を過ごしていただけますように、館内でのルールについて、皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

（学芸員　三谷　渉）

REPORT　岸田劉生展　ー写実から、写意へー

20年ほどの間に、驚くべき集中力で充実した幾多の名作を残して、38歳の若さで亡くなった岸田劉生（1891～1929）の芸術を、「写実から、写意へ」の移行ととらえて振り返る展覧会を、今年2月から3月にかけて開催しました。

この展覧会は、2017年から公益財団法人ひろしま美術館と当館が共同で開催することについて協議を始め、翌年から岐阜県美術館も加わって出品作品や図録の構成等についての検討を重ねてきたものです。

昨年は岸田の没後90年となる年で、改めてその画業を振り返る機運が高まり、東京ステーションギャラリー、山口県立美術館、名古屋市美術館の三館が企画した、もう一つの「岸田劉生展」も同時期に開催され、一人の作家の二つの回顧展が同時に開かれるというまれな現象も起きました。昨年の8月に東京ステーションギャラリーからスタートした展覧会は、油彩画を中心に岸田の制作の過程、変遷を綿密にたどる内容で、偉大な芸術家が刻んだ道程を、しかと見せてくれるものでした。

これに対し、当館で開催した展覧会では、笠間日動美術館の所蔵品を軸にして、岸田の多彩な創作活動をできるだけ広範囲に捉えることをねらい、油彩画以外に、素描、水彩画、日本画、装丁など、その多岐にわたる作品150点以上を一堂に展観しました。岸田の制作を、西洋美術の摂取から東洋的な表現への変移に着目して俯瞰するこの展覧会では、画業の後半に制作の主となっていった日本画作品にも重点をおき、それらの展示が会場のおよそ半分を占めました。また岸田の同世代の文学者たちとの交流や、デザインの資質がうかがえる分野として、装丁の展示にも1室をあてて紹介しました。

昨年の11月にひろしま美術館で始まった本展覧会ですが、当館での会期中に、日本でも新型コロナウィルス感染症の蔓延が危惧される事態となり、計画していた二回の講演会と展示解説会のうちの一回を中止せざるを得ませんでした。ご期待していただいていた方々には申し訳ない限りでした。講演会の講師を予定していた、ひろしま美術館の農澤美穂子さん他、三館の学芸員の論考を掲載し、各会場で出品するすべての作品をカラーで掲載した図録もありますので、またお手にしていただく機会があればと思います。今はこうした事態の終息を願うばかりです。

（学芸員　三谷　渉）

2020年2月8日に行った展示解説会

「くまびで作ろう①」の中止について

今年の2月29日に熊野古道なかへち美術館で開催を予定していました「くまびで作ろう①　おおきな絵をかこう！」は、新型コロナウイルス感染症予防の措置としてやむなく中止いたしました。

参加のお申込みをいただきました方々、作品の展示を楽しみにしてくださっていた方々に、謹んでお詫び申し上げます。

来年の3月に改めて開催することを計画しています。再度ご参加、ご観覧のご案内をいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（学芸員　知野　季里穂）

田辺市立美術館へのきもち㉒

このエッセイを頼まれて改めて考えてみました。ずいぶん前から、田辺市立美術館および学芸員の三谷さんのことを知っているような気がしますが、最初の出会いはいつのころだったのか。最初はなかなか思い出せませんでした。以前いただいた名刺のメモから、2002年の企画展「シニャック―海に吹く東風」展でご一緒したことがわかりました。また、同じ年の当館の企画展「ヴラマンク、里見勝蔵、佐伯祐三展」で作品をお借りしたこともわかりました。あとは芋づる式にいろんなことを思い出しました。田辺市が、大阪からトラックに乗っていくと意外と近いこと。紀伊半島の南部の街にこんなにすばらしい美術館があること。そこで、少ない学芸員で数多くの企画展をやられていること。その後、主だった仕事はご一緒してはいないと思いますが、それでも事あるごとに田辺市立美術館や三谷さんの名前が出てきたこと。掛け値なしで、いつも「いい美術館だ」との印象が残っていました。

今回、久しぶりに展覧会をご一緒することになりました。「岸田劉生展」です。最初は、単独でやるつもりの展覧会でしたが、主な作品所蔵先の日動美術財団から田辺市立美術館と一緒にやってもらってもいいかといわれました。なんの問題もないので、「ぜひ」と即答したことを覚えています。また、私自身、あるいは私の勤めるひろしま美術館は、西洋美術が中心ですので、日本美術に詳しい田辺市立美術館が入っていただけるのが心強かったからです。

その後、岐阜県美術館も加わって、この3館が中心となり、企画構成から練り直しました。もともとは日動美術財団の所蔵品を基本に、全国の美術館から作品を集めて総合的な岸田劉生展をと考えていました。劉生の作品を所蔵する美術館として、一度はちゃんとした岸田劉生展をやりたかったのです。

しかし、ちょうど没後90年ということもあって、大規模な岸田劉生展が全国巡回することがわかりました。結果として、日動美術財団（笠間日動美術館）所蔵の作品を中心に、開催館関連の作品を数点程度加えたものとなりました。

日動美術財団の作品は日本画が多かったので、大劉生展に対抗できるものではありませんでした。それでも、あえてこの日本画を劉生の到着点ととらえ、初期の西洋的な「写実」を追究していた頃の作品から、最晩年の日本画へと至る過程を網羅する大変興味深い展覧会となりました。もともと劉生の「写実」に大変興味を持っていた私は、企画会議で皆さんにそのことを話すと、三谷さんが「それでは、写実から写意ですね」とおっしゃってくれたのが決定的となり、この展覧会が実現しました。結果的には、ピリッとスパイスの利いたいい展覧会になったと自負してします。西洋美術の影響を受けた大正期の日本洋画家としての「写実」から、日本画中心に描く「写意」への展覧会という他にはないテーマのしっかりした展覧会になりました。とくに後半の「写意」は、三谷さんのおかげで深めることができました。

展覧会を練る過程で、久しぶりに田辺市立美術館を訪れました。あいまいな記憶でしかありませんでしたが、美術館につくと、そうそうこんな感じの美術館だったと記憶が蘇ってきました。どこの美術館も多かれ少なかれ問題を抱えているものですが、学芸員の皆さんの工夫で、うまく運営されているという印象でした。テーマとしているところは大きく違うし、私立と公立との違いもありますが、なんだか親近感を感じたものです。この時当館の若い学芸員を連れて行ったのですが、この美術館と学芸員の仕事ぶりをしっかり見ておくようにと耳打ちしたのを覚えています。

田辺市立美術館での会期後半、コロナ・ウィルスの影響で思ったほど多くの人にご覧いただけなったということで、少し残念ではありましたが、久しぶりに展覧会をご一緒でき、よい経験をさせていただきました。中央および大都市で行われる巨大展と地方の小ぶりの展覧会に二極化している昨今、学芸員の力による自主企画を中心に据えていかなければならなくなってきている地方の美術館にあって、こう言い切ってしまうと失礼かもしれませんが、これからも機会があればご協力させていただければと考えています。当館も近年は、所蔵作品を大切にしていくべきとの方針が出されており、意外と知られていませんが西洋美術のほかに、日本洋画のまとまったコレクションを持っています。これを生かした自主企画を行っていきたいと考えておりますので、今後、田辺市立美術館のお力を借りることも増えるだろうと思いながら、このエッセイを終えたいと思います。

（公益財団法人ひろしま美術館
学芸部長　古谷　可由）

ひろしま美術館学芸員室にて

絵画と出会う「この一点!」

松・竹・梅・蘭・菊

会場：田辺市立美術館　会期：2020年6月6日（土）～7月26日（日）

中国絵画では唐の時代から花卉（かき）と呼ばれる草木や果物の図が盛んに描かれてきました。その後、宋の時代になって文人階級が勢力を持つようになると、そこに描かれる植物や小動物、虫などは写生的なものだけではなく、儒教思想を背景にした「人の品性や徳の象徴」として描かれるようになります。その精神性を表現するための手法として、明代から清代にかけてさまざまな画題が『八種画譜』や『芥子園画伝』と呼ばれる絵を描くための手本に登載されました。

それらは日本には江戸時代の中頃に長崎を通じて中国の文物とともにもたらされ、画作の手本として多くの文人墨客たちに重宝されました。桑山玉洲(1746−1799)もまた独自の表現を目指すためにそれら舶来の書物を徹底的に研究し、試行錯誤を繰り返した画家です。本図は年記がないため制作年は不明ですが、落款に火偏のない「粲」の字を使っていることから、35、6歳の頃の作品と思われます。また、草花などとともに霊石も描かれていることから、『芥子園画伝』などの中国画譜類に画題を求めたものと考えられます。玉洲は1781(天明元)年に《草花写生帖》を描き、この写生帖をもとに花卉図などを多く制作していることから、本図もその中の一つではないかと考えられます。

（主任　辰巳　充）

桑山玉州《花卉霊石図》
田辺市立美術館蔵（脇村義太郎コレクション）

田辺市立美術館NEWS　ORANGE　Vol.32
編集　発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館
発行年月日：令和２年４月１日

田辺市立美術館
〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770　FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390　FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

7年前のORANGE　Vol.18から、1年間の展覧会スケジュールを折り込みにしています。切り取って折りたためばコンパクトに保管できるようになっていますので活用していただければと思っています。
これからも多くの方が美術館に親しんでいただけるよう、ORANGEの編集にも工夫を重ねたいと思います。皆さまのご来館をお待ちしています。
（F.O.）